

# ベネズエラの「新しい歌」

## 政治・民衆・文化をめぐる 1970年代の実験とその後

石橋 純

はじめに

1960年代末から70年代にかけてラテンアメリカ各地で伝統的民衆文化\*1を評価・復興し、現代化を試みる広範な運動が渦巻いた。各地のこうした運動において、音楽は中心的役割を担った。チリやアルゼンチンの「ヌエバ・カンシオン」、キューバの「ヌエバ・トロバ」などは、こうした音楽ムーブメントのなかでもよく知られた例であり、今日ではラテンアメリカのポピュラー音楽のジャンル名として定着している。

日本では「新しい歌」という呼び名でも知られるこのようなポピュラー音楽の潮流と社会主義政治運動との関りはつとに語られてきた。しかし同時代のラテンアメリカにおける「民衆文化評価運動」という文脈全体のなかに各地の「新しい歌」の展開を位置づける作業は十分にはなされていない\*2。「抵抗する若者たち」、「社会変革を求める芸術家たち」が、なぜ伝統的な音楽形式に目をむ



セシリア・トッド：「新しい歌」運動の中から頭角をあらわし、今日もベネズエラを代表する歌手として活動中。(©石橋 純 1989年)

けたのか。一見、自明のことのようでありながら、その内実はつぶさに検討されてはいない。

政治や社会に関する「進歩的」問題意識と密接不可分の感性により探求された伝統的民衆音楽の復権ならびに現代化運動——このようにラテンアメリカの「新しい歌」の運動を定義するなら、それは同時代の全世界を席捲した若者文化のひとつの支流であったともいえる。こうしたグローバルな視野からラテンアメリカの「新しい歌」を捉え

直そうという論考は、これまでのところ世に問われていないようである。

このような問題関心にもとづきながら、本稿では、1970年代ベネズエラにおいて展開した、音楽を中心とする民衆文化評価運動と、その底流に存在した「国民アイデンティティ救済思想」に焦点をあてる。周知のとおり、ベネズエラは、58年から2000年現在まで民主主義体制が継続してきた国である。文化的異議申し立てを实践した70年代ベネズエラの若者たちの前には権威主義体制という目に見える「敵」は存在しなかったのである。それでは、彼らが歌に込めた反抗のメッセージは、何を「仮想敵」としていたのだろうか。このような問いに答えようとするとき、「ベネズエラ型民主主義」のあり方、その「政治文化」、そしてこの国で実践された「文化をめぐる政治」の実情が見えてくる。こうした個別の事実を検証しつつ、先に述べたようなマクロな問題考察への布石としよう

というのが、私の目下の企てである\*3。

- \*1 本稿において使用する「民衆文化」は、*cultura popular*の訳語であり、ラテンアメリカにおけるこの用語は「(伝統的)民族/民俗文化」と呼ばれるものから「(商業的)大衆文化」と呼ばれるものまでを広く含んでいることに留意する必要がある。
- \*2 個々の運動についての記述的研究については散発的に成果が発表されてはいる。一例として、Failey, N. "La Nueva Canción Latinoamericana," *Bolletín of Latin American Research*, Vol.3, No.2, 1984など。
- \*3 「ヌエバ・カンシオン」「ヌエバ・トローバ」などに相当するベネズエラの実験的民衆音楽の運動には、固有の呼称が定着していない。本稿では論述の便宜のため、これをベネズエラの「新しい歌」と呼ぶことにする。

第1表 20世紀ベネズエ

	政治発展段階	体制の特徴	大統領	時期
I	権威主義体制	個人独裁型	ゴメス	1908~36
II	過渡的権威主義	軍部派閥型	ロベス メディーナ	1936~41 1941~45
III	民主主義の実験期	初期ポピュリズム	ベタンクール ガジェーゴス	1945~47 1948
IV	権威主義体制	軍部派閥~官僚型	軍事評議会 ペレス・ヒメネス	1948~(52) 1952~58
V	民主主義確立期	協定民主主義	ララサーバル ベタンクール レオーニ	1958 1959~1964 1964~1969
	民主体制安定期	2大政党競合	カルデーラ(第1次) ペレス(第1次) エレーラ ルシンチ	1969~1974 1974~1979 1979~1984 1984~1989
	民主主義の危機	新モデル模索	ペレス(第2次) ベラスケス カルデーラ(第2次) チャベス	1989~1993 1993~1994 1994~1998 1999~

(出所) 諸文献にもとづき筆者作成。

## 1 1970年代の新左翼の台頭

## 文化的価値転換の背景

ベネズエラにおいて音楽を中心とした伝統的民衆文化評価運動が展開したのは、1970年代中頃のことである。この頃からベネズエラ各地の伝統的民衆音楽にもとづいたスタイルや、そうした地方色豊かなレパートリーを得意とする歌手が続々とポピュラー音楽シーンにおいて頭角を表した。

その直前の時代すなわち1950年代から60年代にかけては、ベネズエラにおいてテレビ放送やレコード産業が勃興し、確立した時期にあたる。このころベネズエラのポピュラー音楽市場は外来音楽が大きな比重を占めていた。ベネズエラの伝統音楽に根ざしたポピュラー音楽も存在したが、そのほとんどは大平原地方＝ジャーノのスタイルに取材した都会風のロマンティックな歌謡曲であっ

た\*4。

こうした状況が、1970年代中頃から一変し、地方ごとの多様性を主張するアーティストが名乗りをあげ始めた。このような文化的価値の転換は、新しい政治潮流の勃興と軌を一にしていた。それは、ベネズエラにおける新左翼政治運動の台頭である。

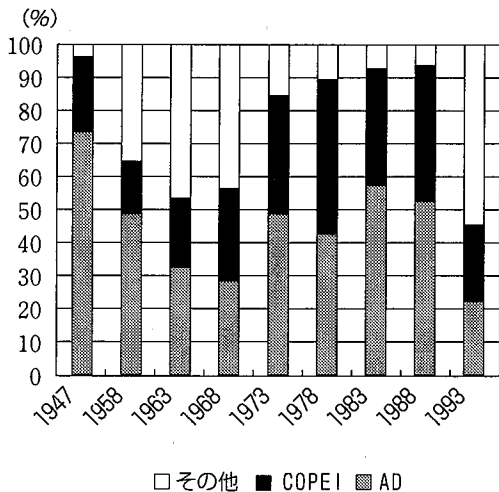
ベネズエラの新左翼を代表するといわれる政党「社会主義への運動」(MAS)は1971年に結党されている。ここでは、まず、MAS結党に至るベネズエラの現代政治史を略述しておこう\*5。

ベネズエラの20世紀は、民主的近代化運動を指向する革新勢力と権威主義体制の対立構造のなかで展開した(第1表)。さらに、革新勢力の中には、ポピュリストと коммуニストの対立があった。結局ベネズエラの近代化を主導する政治路線となったのはポピュリズムであった。その中核的役割を果たした政党は民主行動党(AD)である。

ラにおける政治発展段階

政権党	政権獲得方法	政治・経済モデル	主な出来事
なし	クーデター	中央集権国家構築	産油国転換, 28年運動
ACB PDV	前任者の死 国会投票	上からの民主化 近代化推進	36年事件 政党合法化
革命評議会 AD	クーデター 選挙	「石油を種まく」 輸入代替工業化提唱	初の普通選挙 急進改革
なし FEI	クーデター 選挙操作	開発独裁	人権抑圧 抵抗運動
愛国評議会 AD AD	クーデター 選挙 選挙	ブントフィホ協定 輸入代替工業化推進	OPEC成立 左翼ゲリラ闘争(1962年～)
COPEI AD COPEI AD	選挙 選挙 選挙 選挙	「国内和平」 「偉大なベネズエラ」 緊縮財政 汚職体質	石油ブーム 石油産業国有化 通貨危機 RECADI汚職, 政治改革
AD AD コンベルヘンシア, MAS MVR, MAS, PPT	選挙 前任者罷免 選挙 選挙	新自由主義転換 暫定政権 混乱収拾 「民主革命」	カラカス暴動, 地方分権 クーデター未遂(1992年) 金融危機 制憲議会

第1図 ベネズエラ大統領選挙における  
二大政党得票率：1947～93年



(出所) Levine and Crisp, "Democratizing the Democracy: Crisis and Reform in Venezuela," *Journal of Inter-American Studies and World Affairs*, Vol.40, No.2, 1998, pp.27-60; Kornblith and Levine, "Venezuela: The Life and Time of the Party System," in Mainwaring and Scully eds., *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America*, Stanford, Stanford University Press, 1996, pp.37-71, ならびに Alvarez, Angel E., "Venezuelan Local and National Elections, 1958-1995," in Dietz and Shidlo eds., *Urban Elections in Democratic Latin America*, Wilmington, Scholarly Resources Inc., 1998, pp.243-278, より石橋が抜粋編集。

ベレス・ヒメネス独裁政権に対する抵抗運動のなかで、ベネズエラ共産党(PCV)と民主行動党は共同戦線をはった。しかし1958年に成立した民主体制(いわゆるプントフィホ体制)からは、共産党をはじめとする革命的左派は締め出されてしまった。中道化した民主行動党ならびにキリスト教社会党(COPEI)の二大政党が主導する穏健な多階級的社会民主主義体制——プントフィホ体制はこのような性格をもっていた(第1図)。

翌1959年にキューバ革命が起これると、共産党をはじめとする革命的左翼勢力はプントフィホ体制転覆のため武力闘争を開始する。民主行動党の青年幹部の多くは、穏健化した党の旧世代に反発し、党を離脱しゲリラ闘争に合流する。一方、共産党内部においても新旧世代の対立は深刻な問題であった。革命の条件は整っていないとする旧世代を押し切る形で、共産青年同盟を中心とする若手は尖鋭なゲリラ闘争を実践した。結局ゲリラ闘争は挫折し、1968年には政府とゲリラ勢力との和解が成立し、「国内和平」が宣言される。

ゲリラ闘争中、都市貧困部や農村において民衆

第2表 主な少数野党と新政党の得票率推移(1958～93年)

国会議員選挙(得票率%)	1958	1963	1968	1973	1978	1983	1988	1993
URD	17.4	17.4	9.3	3.2	1.7	1.9	1.4	0.6
PCV	6.2	a	2.8	1.2	1.0	1.8	1.0	0.5
MEP			12.9	5.0	2.2	2.0	1.6	0.6
MAS				5.3	6.2	5.7	10.2	11.8
MIR				1.0	2.4	1.6	b	b
LCR						0.5	1.6	20.8
コンベルヘンシア								13.1

(注) a: 非合法化により不参加。b: MASと連合。

(出所) Kornblith and Levine, "Venezuela: The Life and Time of the Party System," in Mainwaring and Scully eds., *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America*, Stanford, Stanford University Press, 1996, pp.50-51, ならびに Alvarez, Angel E., "Venezuelan Local and National Elections, 1958-1995," in Dietz and Shidlo eds., *Urban Elections in Democratic Latin America*, Wilmington, Scholarly Resources Inc., 1998, pp. 243-278より, 石橋が抜粋編集。

の中に潜伏し、ベネズエラ社会のダイナミズムを内側から体験した青年たちは、「国内和平」後、ベネズエラの現実とオーソドックスなマルクス主義理論との乖離を鋭く批判するようになる。こうした新世代の指導者であったテオドロ・ペトコフは、1971年共産青年同盟を引き連れて共産党を離党し、新党「社会主義への運動」(MAS)を結成する。革新層の期待を一身に集めたMASは、73年はじめての国会議員選挙に臨んだ。その結果、共産党を抑えて、野党第2党の地位に就き、国内外の注目を集めることとなった(第2表)。

\*4 ジャーノの音楽文化の概要ならびにベネズエラ国民文化における位置づけに関しては、次の拙稿(CDライナーノーツ)参照。「ベネズエラの国民舞踊ホローボ」(アルチエラとウルタード『衝撃のストリングス・バトル』[VICG-60342]ピクチャー・エンタテインメント ©2000)。

\*5 Ellner, Steve, *Venezuela's Movimiento al Socialismo*, Durham and London, Duke University Press, 1988; Ellner, Steve, "The Venezuelan Left: From Years of Prosperity to Economic Crisis," in Ellner and Carr eds., *The Latin American Left from the Fall of Allende to Perestroika*, Boulder, Westview Press, 1993, pp.139-154; Bautista Urbaneja, Diego, *La política venezolana desde 1958 hasta nuestros días*, Caracas, Fundación Centro Gumilla, 1997.

## 2 「新しい歌」

### 伝統文化と左翼イデオロギーの結合

結党当初のMASの政治集会は非常に動員力のあるものであった。カラカス市内の野外で行なわれる支持者集会は数十万人規模、ベネズエラ中央大学における学生集会は、数万人規模の動員も珍らしくなかったといわれる\*6。

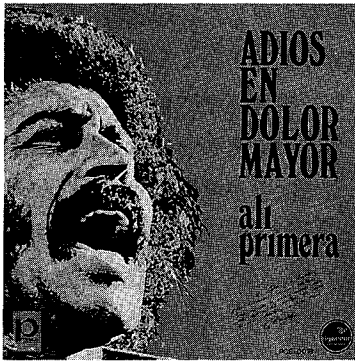
MASの集会は、政治イベントであると同時に一

大文化イベントの様相を呈した。印刷物には時代の先端をゆく文学者の言葉が添えられ、美術作家の意匠がこらされた。党幹部や選挙候補者演説の合間に、国際的文化人が応援の辞を述べ、詩人が作品を朗唱し、そして歌手が賛歌をうたい、数万、数十万の群集が唱和する——これがMASが開拓した新しいコミュニケーション戦術であった。こうした手法は他の左翼政党や学生運動にたちまち影響をあたえ、後に2大政党さえも追従する時代の潮流となった。

とくに音楽は重要な働きを果たしたといわれる。MASに代表される新左翼政治運動と関わる音楽には、明確な傾向があった。結党当初のMASの運動に深く関わった音楽評論家のロベス・ムヒカは次のようにのべている\*7。

(MAS集会において) 変革の意欲を満たし、果てしない人の群れに浸透した詩と音楽のイメージは、たんなる歌として記憶されただけではない。それは、あたかもサウンドトラックのように、誕生間もない組織の政治的メッセージ——あくなき社会正義の追求、遍在する隠れた社会的不公平の告発——を伴奏したのある。(1970年代初頭) 新しい音楽的感性が勃興した時期であった。それまでにない表情で民衆的なものを重視する音楽芸術が生まれたのである。政治の新勢力としてMASが引き起こした論争と闘争の文脈で、従来の音楽形式は再創造され、新しいサウンドの実験が次々に起こり、伝統が現代化されたのである。すなわち、既製の型を破った民俗的ルーツの探求が始まったのである。

このような運動の中から、多くのアーティストが頭角を現した。アリ・プリメーラ、リリア・ベラ、セシリア・トッド、ソレダー・ブラーボといった歌手、ウン・ソロ・プエブロ、マデーラといったグループがその代表的存在である(個々の経歴



アリ・プリメーラ (1942～85年)：ベネズエラの「新しい歌」運動を代表するシンガーソングライター。1964年ベネズエラ中央大学 (UCV) 在学中から歌い始める。過激な社会的メッセージに特徴があり、一貫して反帝国主義、反プントフィホ体制の姿勢を貫き通した。交通事故により不慮の死を遂げたことにより、アリ・プリメーラは変節なき抵抗の主体として、ベネズエラ現代文化の神話化されたアイコンとなった。死後10年を経て、カルデーラ、チャベス両政権下、アリ・プリメーラの歌は時代を象徴するリバイバルを見せている。

写真：政治的暴力により謀殺された友人に捧げたアルバム (PROMUS LPCS-0000181 ©1979)



リリア・ベラ (1951年～)：幼少時代からテレビ番組でベネズエラ伝統音楽を歌う。1960年代末にチリ、アルゼンチンの「新しい歌」運動に共鳴。ベネズエラの学生運動、コミュニティ運動と連帯した音楽活動を開始する。のちにはキューバのヌエバ・トロバの歌手らと親交を結ぶ。ベネズエラの「新しい歌」系歌手のなかでもっとも早くから伝統音楽に接近した歌手で、ベネズエラ中央大学 (UCV) を中心とした活動は70年代ベネズエラにおける伝統音楽復権運動に大きな影響を与えた。

写真：初の商業的デビュー作となった第2作 (PROMUS LPPS-20123 ©1976)



ソレダー・ブラーボ (1943年～)：スペイン生れ。7歳でベネズエラに移住。1960年代UCVに学ぶ。ジョアン・マヌエル・セラールなど、カタロニアのシンガーソングライターと交流を持ち、80年代から90年代にかけて、ベネズエラの「新しい歌」系歌手のなかでもっとも大きな国際的な名声を獲得した存在。ベネズエラ伝統音楽のみならず、スペイン、ブラジル、キューバの伝統音楽から現代音楽までをとりあげ、驚異的に広いレパートリーをもって現在もベネズエラ・ポピュラー音楽の第一線で活動中。

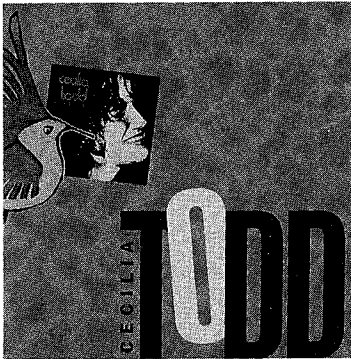
写真：1970年代～80年代にかけて録音されたベネズエラ民俗音楽のコンピレーションCD (TH 1A501-00503 ©1990)

については26～27ページの写真説明参照)。こうした新進アーティストたちは、当初テレビ放送や商業的レコード販売といった、文化産業内の流通チャネルを確立していなかった。このため、彼らが大衆の前で公演する機会は、1970年代を通じて左翼政党の政治集会や学生集会の場ということが圧倒的に多かったのである。

「左翼政党+進歩的知識人+伝統的民衆音楽」という組み合わせによる対抗文化運動は、この時代、全世界的に見られた現象である。実際ラテンアメリカにおいては、ベネズエラに先んじてアルゼンチン、チリ、キューバなどでこのような運動が興隆しその影響はベネズエラの若者に及んだ。しかし、ベネズエラの進歩的なインテリ青年たちが、ベネズエラの伝統音楽を積極的に評価し、地域に

根ざす多様な音楽形式をとりあげ、表現するにいたるには、ベネズエラ国民文化の内側からの根源的価値転換が必要であった。

というのも、1960年代ベネズエラの文化的左翼は、透徹した普遍志向、未来志向の芸術表現を求めていたのである。それはまさに「前衛」「革命」という概念が本来意味する方向であった。文学では前衛詩がこの時代の芸術潮流を創り、美術の分野ではインスタレーション\*8を得意とする作家群が世界的評価を受けた。1960年代の左翼芸術家は、過去につながる歴史的表象あるいは伝統的文化表象を、ベネズエラの半封建的で前近代的な過去、あるいはブルジョア化に向かう陳腐な同時代につながるものとして、徹底的に批判・破壊を試みたのである\*9。



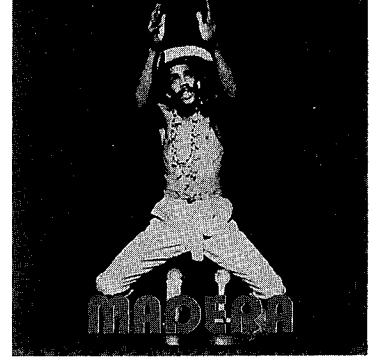
セシリア・トッド (1951年～): ソレダー・ブラーボ, リリア・ベラとならぶベネズエラ「新しい歌」の3大女性歌手のひとり。1973年から4年間アルゼンチンに住み、レコードデビュー。当時のアルゼンチンのヌエバ・カンシオンの音楽家と密接な交流を結ぶ。ベネズエラ各地の伝統音楽に造詣が深いが、とりわけカラカスの古い民衆音楽に関しては第一人者というべきスタイルを築いた。現在も多くのファンを集める個性的歌手。

写真: 1974年にアルゼンチンで録音されたデビューLPの復刻CD。  
Pajarillo Verde (ACOUA  
AQ003 ©1997)



ウン・ソロ・プエブロ (1976年結成): 器楽奏者のヘスース・ケラーレスが率いる総合的民衆音楽グループ。ベネズエラ各地の伝統音楽を現場に取材し、これをステージ公演や、レコード音楽として再現。1980年代初頭、彼らが録音したアフロ系ベネズエラ音楽は、大きな商業的成功を納めた。現在では、結成当初のような実験性、芸術性を追求した表現活動からは離れ、ダンス音楽市場のなかでアフロベネズエラ系老舗バンドといった定位置を得て活動している。

写真: ウン・ソロ・プエブロの商業的成功を決定づけたアルバム第2弾  
La música de Un Solo Pueblo  
(PROMUS LPPS-20270 ©  
1980)



グループ・マデラ (1978年結成): カラカスの周縁的コミュニティ「マリン」の若者が結成。アフロカリブ系の民衆文化の復権を目指し、アフロ系ルーツを積極的に主張しようとしたグループ。ベネズエラの都市下層において実践されるあらゆる音楽を表現手段とし、カリブ海各地のリズムを取り入れるボーダレスな音楽を指向した。1980年オリノコ川で水難事故に遭遇、メンバーの半数が死亡する悲劇に見舞われた。

写真: 事故前のオリジナルメンバーが  
遺した唯一の音源(1979年録音)  
の復刻CD (TH 1A501 00530A  
©1991)

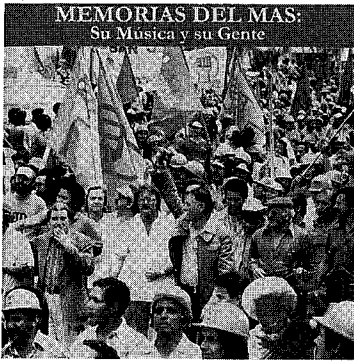
一方、政治的前衛の一翼を担った青年層にとって、民俗文化、伝統文化は民主行動党的なポピュリスト政治の象徴であった。1960年代後半、国外から「新しい歌」運動の影響が流入し始めると、左翼学生達の間ではチリやキューバのプロテストソングをそのまま模倣して歌うことが流行になった。しかし、ベネズエラの伝統音楽を取り上げるという発想は若者たちの視野に入らなかったのである。1960年代、カラカスの大学キャンパスにおいて行なわれるイベントにベネズエラの伝統音楽の出し物が登場すると、会場からはブーイングが起り、「民主行動党の手先は帰れ!」と、ヤジが飛んだといわれる\*10。

それでは、伝統文化と左翼イデオロギーは、どのような道筋を辿って1970年代の結合に至ったの

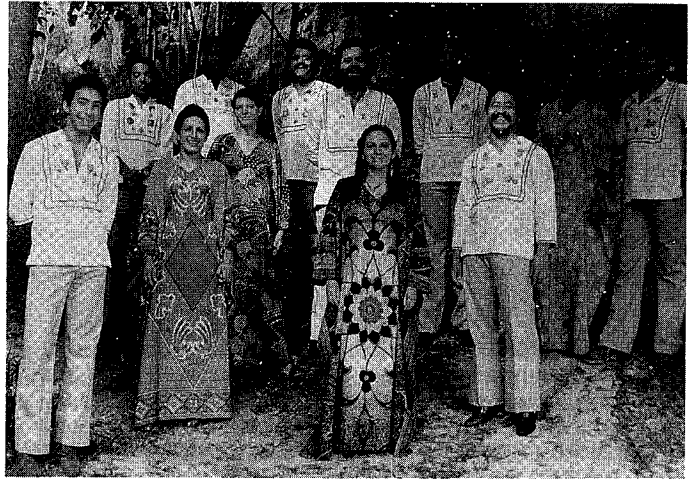
だろうか。ベネズエラの左翼知識人が、60年代の前衛芸術志向から離れ、伝統文化を評価し、国民アイデンティティの再興をめざすパラダイム・シフトに至る歴史の転換点は、68年前後にあったと私は理解する。

1968年は、ベネズエラ史上初めて選挙による与野党交替が実現し、代表民主主義が安定期に入ったと評される年である(第1図参照)。同時に、この年「国内和平」が宣言され、左翼ゲリラ闘争が完全に挫折した年でもあった。革命的左翼活動家にとって、それは目標の喪失を意味し、根本的価値転換を迫られる決定的状況であった。

一方、1968年は、戦後秩序の再編と世代交代を要求する青年運動の契機となる大事件が世界各地で起こった年でもある。「パリ五月革命」、「プラハ



MASの結党28年を記念して製作されたCD「MASの思い出：その音楽と人々」写真中央で片手を挙げているのが73年、78年の選挙で大統領候補となったホセ・ビセンテ・ランヘル（現外務大臣）。その左隣（白シャツに眼鏡）がテオドーロ・ベトコフ。



1980年ごろのウン・ソロ・ブエプロ（LP「La música de Un Solo Pueblo」Volumen 3, PROMUS LPPS-20285 ©1981より転載）

の春」事件，キング牧師暗殺事件，ベトナム北爆の開始，「トラテロルコの虐殺」事件などは，そのごく主要な事例にすぎない。ベネズエラの，元ゲリラ活動家の中には，このような激動に呼応して新たな活動目標を見いだす敏感な知識人も少なくなかったのである。

1970年代ベネズエラに興った政治・社会・文化の新潮流は，それぞれの方法で新しい価値を模索した新左翼知識人の貢献によるところが大きかったといえる。MASに代表される新左翼政党の誕生がその重要な一例である。住民運動・女性運動・環境運動といった市民運動が，初めてベネズエラに台頭するのもこの時期であった。これらの新しい社会運動の主導者の多くはゲリラ闘争を経験した左翼活動家であった\*11。さらに，この時代，出版・放送・広告・興業・音楽コンテンツといった文化産業が大発展するが，その背景にも多くの左翼系知識人の存在があった。

\* 6 以下本章における記述は1999年に筆者が実施したインタビュー調査による。主な証言者はホアキン・ロベス・ムヒーカ（音楽評論家），アル

フレード・チャコン（人類学者），リル・ロドリゲス（音楽ジャーナリスト），ほか。さらに詳細な証言データならびに協力者のプロフィールについては，石橋純「タンボールの政治性——ベネズエラ，サンミジャンにおける民衆文化・アイデンティティ・民主主義——」（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻平成11年度提出博士學位論文）を参照のこと。

\* 7 MAS創立28周年記念CD（Fracción Parlamentario del MAS. *Memorias del MAS: Su música y su gente*, ©1998）に寄せられたライナーノーツ。このCDのプロデュースをてがけたのは，後述するウン・ソロ・ブエプロの創立者，ヘスース・ケラーレスである。ウン・ソロ・ブエプロ，アリ・プリメーラなど，MASと深く関わった音楽家が1970年代に録音したMAS支援の演奏が再録されている。

\* 8 インスタレーションとは，「さまざまな物体・道具を配置してある状況を設定し，その展示空間全体を作品とする手法。また，その作品」（『広辞苑』第5版 CD-ROM）。ベネズエラを代表するインスタレーション作家としては，カルロス・クルス=ディエス，アレハンドロ・オテロ，ヘスース・ソトなどが有名。

\* 9 Chacón, Alfredo, *La izquierda cultural de*



Venezuela, Caracas, Editorial Domingo Fuentes, 1970.

\*10 民主行動党が主導したポピュリスト政治と民俗文化の密接な関係については、本稿では触れる余裕がない。詳しくは、前掲学位論文を参照のこと。

\*11 Gómez Calcaño, Luis, *Crisis y movimientos sociales en Venezuela*, Caracas, Editorial Tropiccos, 1987.

### 3 国民文化の再評価・復権

#### 「新しい歌」がめざしたもの

民衆文化の伝統を評価し、伝統音楽を文化的シンボルとしてイデオロギーにとり込んだ1970年代ベネズエラの文化的左翼の言説を検討すると、そこからは次のような思想のアウトラインが抽出できる\*12。

- ・ベネズエラは石油経済を通じて、資本主義世界システムの新植民地構造に従属している。
- ・石油レントによる潤沢な外貨は、輸入品だけではなく、コーラ、ジーンズ、ロック・ミュージックに代表される帝国主義的輸入文化の急速な普及をもたらし、文化的従属状況を生み出した。
- ・安易な輸入文化の急激・大量の普及・浸透は、ベネズエラ固有の文化を破壊しつつある。これと平行してベネズエラ社会には外来文化を無批判に崇拝する価値観が浸透しつつある。すなわちベネズエラ国民は急速に文化的アイデンティティを喪失する過程にある。
- ・このような文化侵略と固有の価値破壊の進行を食い止め、文化帝国主義に対抗するために、知識人は地域社会の住民と手を携えて、国民文化のアイデンティティを救済=奪回しなければならない。

このような枠組みで、国民文化の再評価・復権を企図する思想潮流を、ここでは「国民アイデンティティ救済思想」と呼ぶことにする。

一見して明らかなように、国民アイデンティティ救済思想は当時開発経済学において主潮流のひとつであった従属論の影響を強く受けている。また、ユーロ Kommunismusを生み、MASの誕生をもたらした新左翼政治思想の特徴も色濃く反映している。従属論にせよ新左翼政治思想にせよ、この時代を主導したイデオロギーはいずれも「周縁」地域の独自性を模索し、「中心」からの抑圧を断ち切ろうという方向性を目指していた。これを「文化」に敷衍するとき、伝統的民衆文化が積極的な評価の対象とされたのは当然といえよう。

「国民アイデンティティ救済思想」はさらに複数の観点から分析することができる。まず、石油依存経済を批判しこれを乗り越えようという悲願は、1920年代以来、開発主義と表裏一体の関係をなす批判言説として常にベネズエラの近代化思想を構成してきたということである。石油レントという、外在的で非生産的な富への依存を断ち切り、国に根づいた「本物の」産業を育成したい——幾多の知識人がこのような願望を言説化してきた\*13。その意味で、この時代いっそう顕著となった石油ブームの破壊的側面を、鋭く批判する立場は、20世紀ベネズエラ知識人の「伝統的」な構えであったといえよう。そして、政治的に完全な敗北を喫して70年代を迎えた左翼知識人にとって、文化の問題は体制批判を實踐できる数少ないアリーナだったのである。

文化的アイデンティティ救済思想は、民衆と左翼知識人との間に成立した直接のコンタクトの産物だということも重要である。ゲリラ運動を通じて、左翼活動家は、都市貧困地域や農村に分け入り、長期にわたり住民と生活をともにした。これ

により、彼らは、1960年代に定着していた国民文化のステレオタイプ\*14と、地域社会の文化的現実との乖離を体験的に認識したのである。同時に、左翼知識人との日常的な交流は地域住民の社会的・文化的自意識を高める契機ともなったのである。こうした知的刺激は、識字率や就学年数の向上、さらには民主的価値の浸透とあいまって、住民自身が地域文化を積極的に表現・主張するという、新しい態度形成を促した。

都市においては、伝統音楽を伝承する地方出身の若者が、学生運動や左翼政治運動の環境の中からアーティストとして台頭し始めた。都市における農村出身者の爆発的増加とも呼応して、新しい民衆文化表現は熱狂的歓迎をもって迎えられた。こうしたアーティストの活動は、政治的プロパガンダや学生運動・市民運動とも複合して全国に知れ渡り、各地の青年たちを鼓舞した。1970年代後半、地域社会の青年たちはみずからの文化的ルーツを探求し、これを再帰的に創造しながら文化的・政治的主張を発信するようになったのである\*15。

こうした潮流をもっとも忠実に反映し、またこのような運動を主導する役割を担ったのは、実験的民衆音楽集団の「ウン・ソロ・プエプロ」であろう。1970年代中頃活動を開始したこのグループは、当初ケーナやチャランゴを演奏し、ポリビア音楽を模倣することから出発した。その後、ベネズエラ各地の伝統音楽を現地に取材し、各地の優れた若手歌手や器楽奏者をメンバーに加え、ベネズエラ民衆音楽の「オールスター・チーム」の様相を帯びつつ急速に全国的名声を確立した。結成当初から政治・社会活動にも強くコミットし、70年代のMASの政治集会において音楽面での中心的役割をつとめることが常であった。

しかしながら、1980年代中頃から、ウン・ソロ・プエプロの活動方向は大きく転換する。その商業

的成功と裏腹に社会性・政治性は急速に薄れていく。2000年現在も活動を続けるウン・ソロ・プエプロは、大規模音楽イベントにおいてルーティンとしてのアフロベネズエラ音楽を淡々と演奏する商業目的のダンス・バンドへと変貌してしまったといえよう。

国民アイデンティティ救済運動の先鋒であったウン・ソロ・プエプロのこのような変節ぶりには、1980年代後半から90年代にかけてのベネズエラにおける政治・経済・社会・文化の状況変化が反映されている。次節ではこうした点について素描する。

\*12 ここに要約する1970年代ベネズエラ左翼の文化イデオロギーは主として、次の文献とインタビュー資料から抽出した。Quintero, Rodolfo, *La cultura del petróleo*, Caracas, Universidad Central de Venezuela, 1975; Chacón, Alfredo, *Contra la dependencia*, Caracas, Síntesis Dosmil, 1973; Mosonyi, Esteban Emilio, *Identidad nacional y culturas populares*, Caracas, Editorial Enseñanza Viva, 1982.

[インタビュー] (1999年筆者が実施) ——アルフレード・チャコン (人類学者)、リル・ロドリゲス (音楽ジャーナリスト)、ヘスース・ガルシア (歴史家)、マヌエル・アントニオ・オルティス (音楽学者)、ラファエル・サラサル (民衆文化研究家)、エリック・ヌニェス (人類学者) ——詳細については、前掲学位論文参照。

\*13 20世紀ベネズエラを代表する思想家・政治家であるアルトゥーロ・ウスラル・ピエトリが1930年代後半に提唱した「石油を種まく」思想は名高い。Uslar Pietri, Arturo, *Venezuela en el petróleo*, Caracas, Urbina y Fuentes, 1984.

\*14 たとえば、大平原地方 (ジャーノ) の文化をもって国民文化の代表とするようなステレオタイプ。このような文化観は民主行動党が主導したポピュリスト政治運動とも密接な関連があった。詳細は前掲学位論文 第9章参照。

\*15 こうした運動の過程で、それまで伝統文化を

指し示す用語として使われた“folklore”（民俗文化）という用語が批判され、“cultura popular tradicional”（伝統的民衆文化）と言い換えられるようになった。本稿において「民俗」という用語を避けているのも、用語に込められた価値観への配慮からである。

#### 4 1970年代末以降の「転向」

##### 「新しい歌」のその後

1960年代末から70年代にかけて全世界を席捲した対抗文化運動は、周知のとおり、遅くとも70年代末には失速するにいたる。先進諸国においては、70年代の学生運動ならびに対抗文化運動が挫折した後、80年代は技術革新をとまなう市場経済の一大発展期が到来した。こうした社会では「ヒッピーからヤッピーへ」「全共闘から企業戦士へ」という180度の価値転換が、「転向」の典型として語られる。

変節の季節はベネズエラにもやってきた。ただし、この国の進歩的知識人の「転向」経路は、先進諸国や、新自由主義経済改革が成功した国々（チリなど）のそれとは異なる様相を見せている、と私には思える。ベネズエラの場合、革命的左翼活動家の「転向」経路として、極端な個人主義の追求に走ったり、企業社会の価値に自己を埋没させるといった方向は、少数派に限られるようである。

こうした点については、これまでベネズエラをフィールドとする社会科学の議論の俎上にのせられていない。また、私自身の調査も緒に就いたばかりである。ここでは今後の課題を見据えた問題提起として、以下の点を記しておきたい<sup>\*16</sup>。

- ・1980年代に入ると、ベネズエラにおいても対抗文化運動は失速するにいたるが、これは先進諸国のように経済発展の帰結として市場主義経済の価値観が国民の隅々にまで浸透・共

有されたからではない。石油ブームによる国家主導経済の恩恵が、国民の隅々までいき渡ったからである。こうした文脈において、左翼政党や若者は体制に取り込まれたが、市場原理による自由競争から成り立つ社会を積極的に肯定する価値観は主流とはならなかった。

- ・無数の個人・法人が自己のリスクと責任において自由な競争を展開し、その結果淘汰と発展が起り、それらの総和として国民経済が大きく成長するという好況のパターンをこれまでベネズエラ社会は経験していない。人類学者フェルナンド・コロニルも述べているとおり、ベネズエラにおいて大成功する企業人のイメージは、政治家と結託して利権を手にする相場師のそれである<sup>\*17</sup>。このため、ベネズエラにおける企業社会は進歩的知識人・若者にとって「転向」後の魅力的な活動アリーナを提供しなかった。

革命的社会変革運動の挫折に突き当たった個人は、体制の中に自己を位置づけねおさなければならぬ。1968年の「国内和平」後、急進左翼は代表民主主義制の中に自己の居場所を見つけないならなかった。さりとて進歩派のアイデンティティは捨てたくない——このようなジレンマを抱えた知識人にとって、「文化」というアリーナは恰好の場だったはずである。国民アイデンティティ救済思想の興隆と文化運動の展開にはそのような背景があった。

しかしながら、こうした運動の最盛期であった1970年代後半には、進歩的知識人の変節はすでに始まっていたのである。史上空前の石油ブーム期に政権を担当したカルロス・アンドレス・ペレス（第一次政権、1974～79年）は、文化庁（CONAC）

の設立をはじめ先進的な文化行政を展開し、プレスティッジの高い官職と潤沢な予算を給付することにより左翼系文化人に知的ラディカルとしての自己実現の機会を与えた。裏を返せば、これはまことに巧みな左翼懐柔策だったといえるだろう。

1983年の通貨危機後、為替管理制が施行されたベネズエラにおいては、放送・出版・音楽コンテンツ制作などいわゆる文化産業にとって、外国制作の素材に依存することが、制度上も経営上もきわめて困難になる。こうした状況は国内におけるコンテンツ制作のブーム状況を引き起こす。映像・音楽・出版産業の国内制作部門は80年代に大きく伸長した。同時期のベネズエラ経済全体の沈滞からすれば文化産業は例外的発展を示したとさえいえる。

1970年代、文化的異議申し立ての旗手として、既製チャンネルの外から「文化的アイデンティティの救済」を主張した多くのアーティストは、このような状況下、80年代の文化産業内に定位置を見だし、「国民的アーティスト」の名声を獲得した。80年代ベネズエラにおいて、文化はビジネスとなり、体制変革を実践しようというラディカルさをもったアーティストはほとんどいなくなった。

しかも、そのビジネスのあり方は、個々の企業家が自己の責任とリスクの下で、自由競争しながら切磋琢磨してゆくという、市場主義経済のスタイルとは大きく異なっていた。それは、為替管理制というポリティカル・エコノミーの歪みから生じたビジネス機会をとらえ、行政に依存しながら発展していくという、クライエンテリスティックなビジネス・スタイルだったのである。輸入代替工業化の過程で、政府の保護を前提に発展した製造業者がレント依存体質を身につけたように、多くのアーティスト、プロデューサーもまた、より良い機会を得るためにより良い政府系コネクショ

ンを頼りにするという、行政依存の構図に取り込まれていくのである。

\*16 以下の見解はアルフレード・チャコンとの議論（1999年8月27日、9月1日）の所産である。記して謝意を表する。

\*17 Coronil, F., *The Magical State : Nature, Money, and Modernity in Venezuela*, Chicago, The University of Chicago Press, 1997, p.319.

## おわりに

以上、本稿では、1970年代ベネズエラにおいて展開した伝統的民衆文化評価の運動ならびにその底流にあった「国民アイデンティティ救済思想」を紹介し、同時代の政党政治との具体的関連を明らかにした。また、70年代に社会変革の思想と密接に結びつきながら発信された民衆音楽の実験が、80年代後半以降商業化し脱政治化する過程についても触れ、あわせて進歩的知識人の変節にみられるベネズエラの特徴についても言及した。

「国民アイデンティティ救済」運動の中心的存在であったウン・ソロ・プエブロのような音楽集団が、次第に実験精神を失い、音楽産業に取り込まれたことを指摘したが、このことは、次のように捉え直すことも可能である。すなわち、特定の文脈のなかで興隆した民衆音楽の実験が、ひとつのスタイルとして定着し、音楽産業がこれを利用してつつビジネスを拡大再生産する可能性さえもが開けた、という解釈である。政治運動に依存しなければ大衆の耳には届くことのなかった文化的エリートの実験が、その後年月を得て、ダンス音楽として淡々と消費される状況が出現したということは、そのような音楽のスタイルが「民衆の表現」として完全に定着したということでもある。

ヌエバ・カンシオン運動の発信源であったチリでは、このところキラパジュンやインティ・イリ

マニなど、懐かしい名前のアーティストが健在ぶりを示し、かつての音源もまた続々と復刻されているという\*18。彼らにせよ、30年間アーティスト活動を続けてきたということは、さまざまな形で時代に適応し、「変節」を重ねてきたに違いない。このようなアーティストの息の長い活動を説明するには、特定の政治状況との関係だけに着目して論じても成果は乏しいだろう。むしろ1970年代に興った伝統的民衆文化の評価運動とその後の展開を、より広く当該社会の「政治文化」ならびに「文化をめぐる政治」との関連において再解釈する作業が、今必要とされているのではないだろうか。

そのような作業は、ラテンアメリカの対抗文化運動を、地球規模の拡がりのなかに位置づけなおすことに直結し、さらには2001年以降のラテンア

メリカ民衆文化を考察するための準備ともなるはずだ。本稿は、このような問題意識にもとづく、ささやかな試みであった。

\*18 チリのヌエバ・カンシオンの音源復刻に関しては、長野太郎「終らないヌエバ・カンシオン運動の実験」(第1回～第3回)、『ラティーナ』No.557-No.559 2000年)参照。

【付記】 本稿は東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻平成11年度提出博士学位論文(「タンボールの政治性——ベネズエラ、サンミジャンにおける民衆文化・アイデンティティ・民主主義」)第9章にもとづき本誌のために大幅に編集・改稿したものである。紙幅の都合上、出典データは必要最小限に留めた。詳しくは、学位論文本体をご参照いただきたい。

(いしばし・じゅん/宇都宮大学国際学部)